

令和6年度 輪之内町立福東小学校 自己評価書

学校の教育目標	豊かな心 たくましい力のある子 ～考える子 仲よくする子 やりぬく子～
経営の重点	自分の考えや思いを生き生きと表現し、 関わり合いを通して、学びを深める子 ○子どもの笑顔と瞳が輝く学校 ○安全・安心な学校 ○保護者や地域が愛し、誇れる学校

評価基準 A(3ポイント):実践し、効果をあげることができた。
B(2ポイント):実践し、一応の効果をあげることができた。
C(1ポイント):実践し、僅かだが効果をあげることができた。
D(0ポイント):実践したが、効果をあげることができなかった。

町の重点	評価の窓	評価	12月までの成果	12月までの課題と1月以降（来年度に向けて）の改善策
【道徳教育】 自己を見つめる力と他を思いやる心を育てる。	生き方（命の大切さ）についての考えを深める道徳教育の充実	A	・校内研究主題を「心の教育」を軸とした道徳科の実践として取り組んだことにより、日常の学級経営や児童理解とともに、特に「行為の裏側にある心情」を引き出す指導が広がってきた。 ・本校の常時活動や出前講座、「能登の被災地域の方々へエール」を送る活動との相乗効果が児童の姿に表れてきている。 ・研究授業では毎回河合先生から具体的に指導をしていただくことができて、全校体制で研究を進めることができた。 ・子ども達にどんな弱さがあり、どんな心を育てていきたいか、実態把握と目指したいところを明確にして、授業改善に取り組むことができた。 ・研究授業を通して、自己の生き方を見つめるための、指導援助について、終末の自己見つめを充実させることができた。 ・研究授業や研究授業のための模擬授業に参加する中で、子どもの発言の引き出し方や、人間理解、価値理解をおとしておくための発問の仕方等、他の学級(先生)から学ぶことができた。また、それを学級に活かすことができた。	・令和8年度を見通した形で、研究の柱の中に「低学年⇒役割演技・高学年⇒小集団交流」を位置付け、発問を工夫することにより、自分事としてとらえ、考え議論する姿を引き出すことで、より深い価値理解を目指す。 ・特学においては、特に「生単」「自立活動」の取組の中で、関わり合いを通して「心の教育」の具現を目指して実践を発展させる。 ※次年度の年間指導講師も、引き続き河合宜昌教授にお願いし、4月上旬の研究職員会にて共通理解を図り実践を始める。
【人権教育】 自他の違いを認め、互いに人権を尊重する望ましい人間関係を醸成する。	児童生徒と全教職員が一体となっていたいじめや差別を許さない学校・学級づくり	A	・「ひびきあい集会」への学校全体・学年ごとの取組をはじめ、日常の「よさ見つけ」など、仲間のよさを見つめる目を大切にした学級経営が進められてきた。 ・教職員間でも、「いじめ・差別」事案についての交流や打合せの機会があり、感覚を鋭くしていけるよう努めている。 ・差別につながる言動をゆるさず、その都度指導していくことができた。 ・学級で、仲間が頑張っていることや、素敵な姿に目を向けられるように、価値付けすることができた。子ども達も、仲間の少しの成長も見逃さず、互いに認めて、言葉で伝えられるようになってきた。 ・相手を傷つける行動や言葉(差別)について許さず、学級みんなで考えるような指導ができた。 ・問題が起きたとき、連携をして迅速に対応することができている。 ・かがやきみつけは毎日帰りの会で記入できた。さらに、どの児童にも複数枚以上、4つの項目すべてにコメントを残すことができた。 ・いじめ対応を担当任せにせず、職員が連携して対応できているところがよい。担任としてもたくさんの先生に助けていただけているのは心強い。 ・高いアンテナをもち、小さな変化も見逃さないように、児童とかかわることに努めた。 ・学級や交流学級の児童の良さを学年関係なく見つけることができた。	・個々の「苦手なこと」や「不安なこと」を学級の仲間と共有しながらも、一人一人がそれを乗り越えていく姿を応援できるような、あたたかさのある集団へとさらに高めていくこと。 ・人権教育を特に意識して行なっていく必要があるクラスがある。すべての職員が今以上に人権感覚を鋭くして指導にあたっていく。 ・「いじめは理由があれば仕方ない」のではなく、「どんな理由があっても許されない」という意識がもてるようにする日々の指導が必要。 ・「子どもの権利条約」に関する内容を、全校集会で取り入れ、学年ごとに考える場を設定する。
【生徒指導】 共感的な児童生徒理解に徹し、よりよい人間関係の形成を図り、自己指導能力を育てる。	いじめ・不登校・自殺等の未然防止と早期発見・対応の強化 SOSの出し方教育の推進と相談体制の強化	A	・毎月「にこにこアンケート」を実施し、子どもの心の状態を把握して、毎週水曜日のロング昼休みを使い、担任が全員の子どもと面談を進めてきた。状況に応じ、SCのカウンセリングも取り入れている。 ・夏休み明けに全学級で「SOSの出し方」授業を実施し、不安なことや困り感が生まれてきた時の対応や心の在り方について考えた。 ・いじめ案件が起きたときに組織的に対応している。 ・いじめや差別につながる言動があった際には、管理職に報告・相談を行い迅速に対応することができた。朝の会や帰りの会では、学級の一員として自覚できるように価値付けすることができた。 ・全校の先生で、全校の児童の様子やちょっとした変化などを、職員同士で、情報を交換しあっている職員室の雰囲気がいじめの未然防止につながっていると思う。 ・SOSの出し方については、各学年で実態や状況に応じて授業を進めることができた。また、児童間で起きた問題行動等について、迅速に対応できていたことが多かった。 ・全教職員が一体となって、いじめ、不登校、自殺等の未然防止に努めることができた。また、早期発見、対応を行うことができた。 ・迅速に関係職員が集まり、対応の見通しを話し合うことができ、とても有り難い。 ・毎月、「にこにこアンケート」を実施することで、児童の悩み等の早期発見・早期対応に繋がっている。	・「いじめ」を認知した後の職員の共通指導体制が、どの職員にも共有できるようになってきた。見届けの方法や関わり方を保護者と確認しつつ、確実にやりきっていくようにする。 ・問題に直面した児童が自らSOSが発信できるように、今後も夏休み明けにSOS授業を全学年に位置付ける。 ・また、SOSを受けた側になったときに、自分がどう動いていくのかということについても子どもたちに考えさせる場があるといいと思う。 ・現在、保護者と本人へアプローチしているKMさん、KRさん(現在改善傾向)やATさん(次年度へ向けて働きかけを進めている)への対応を継続すると共に、新たな不登校傾向児童が出ないよう対応を考えることが必要である。
【総合的な学習の時間】 探究的な学習を通して、よりよい問題を解決する資質・能力を育てる。	「ふるさと輪之内」に学ぶ態度と輪之内を愛し誇りに思う心を育成する探究活動の充実	B	・どの学年も、多くの出前講座や校外学習を含め、体験的な活動が積極的に進められてきており、輪之内町内や近郊の施設、人材、歴史などから学ぶ機会が得られている。 ・小学生の発達段階に合わせ、体験を通して五感を通じ、実感的に学ぶ取組をもとに、素直で正直な感想や学んだことをもとに自分で考えた内容を整理し、まとめ・表現(発信)へ向かおうとしている。 ・生活科の町探検の学習を通して、地域の方々にお世話になり、自分たちが住む「輪之内町」について、知るとともに、支えられていることを実感することができた。 ・外部講師(出前授業等)の専門的な指導の機会も多くとることができた。児童が興味関心をもって取り組みようよう工夫がなされていた。 ・防災教育を通して、段ボールベットや簡易トイレの組み立て方を学ぶことができた。自分たちの住む、輪之内町に地震や津波が来た時に、防災教育で学んだことを活かすことができる。 ・地域の方の読み聞かせや実技実習のボランティアなど、地域の方と関わることで郷土愛が深まった。 ・輪之内町の特産である懸崖菊など地域に関する学習であった。 ・福東講座や読み聞かせ等からも、地域の方にお世話になっていることを感じていると思う。	【年間を通した主題の「入口と出口」を明確に、特に「課題設定」の段階を丁寧に準備し、出口のイメージをはっきりとをもって取り組みをスタートさせる】 ・4月上旬の研究職員会にて、共通理解を図ってから実践の準備に入る。 ・「探究的な学習」をイメージして、「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」というサイクルが踏まえられているかを再度確認しながら、まとめの時期の活動へ向かうことが必要である。 ・年度末のまとめの段階、児童それぞれの課題を情報を発信する(プレゼンテーション等)ため、情報の活用の仕方、伝え方について、他の教科とつながりをもちつつ取り組ませたい。
【教科指導】 基礎的・基本的な知識・技能の習得を図るとともに、思考力・判断力・表現力及び自ら学ぶ意欲や態度を育て、学力向上を推進する。	主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善	A	・教科指導の重点を全体で確認し、各単元ごとの指導計画に沿って実践を進めている。単位時間の指導の中に、導入場面での提示の工夫や準備、追求場面での手立ての準備や交流の工夫、終末場面での見届けなど、授業のイメージを具体的にもち、指導を進めている。 ・「聞く・話す」「つなぎ発言」「少人数交流」など、学びを支える学習規律を継続的に全校体制で指導している。 ・授業の中で、目的のある交流を位置づけ、仲間同士の学び合いを大切にすることができた。仲間の意見を聞くことで、自分の考えを深める児童が増えてきた。 ・教科の基礎的・基本的な知識・技能の習得のために教材研究や教材を準備したことで、関心をもって取り組む児童が増えてきた。 ・「分からないこと、難しいと感じたこと」について、そのままにせずチャンスととらえるように指導してきたことで、分からないことをそのままにせず、仲間との話し合いで解決しようとする姿が増えてきた。 ・グループワークや自由交流を通して、自分の考えを相手に伝え、またその考えについての意見(感想)を伝え合う学び方ができるようになってきた。 ・自分の考えを発言する際に、全校体制の「つなぎ発言」を意識する児童が増えた。また、ハンドサインを用いて反応する児童も増え、内容をつなげていったり、深めていったりする追求の姿が表れてきている。 ・6年生の理科で主体的な学びの授業に挑戦し、校内にて広めていった。自分たちで見通しをもって実験方法を考えたり考察したりすることで、児童が意見を言い合って学ぼうとする姿を共有して、他の教員が自身の授業へ生かすことができた。 ・年度初め、書くことや話すこと、読むことについての苦手意識が非常に強かったため、視写、音読をできるだけ多くの教科で行ってきたことで、抵抗感が減少したと思われる。また併せて辞書引きを国語科の授業の最初に毎回行ったことで、言葉への興味を継続してもたせることができた。	・単学級規模の学校であることから、教科指導の進め方を担任一人だけで考える形に陥らないよう、学年部体制での相談・打合せを進めており、場合によって、教務主任も加わりながら進めているが、助言が必要な職員もいるため、さらに対応を検討する必要がある。 ・児童が興味・関心のある学習活動を工夫して、主体的に学ぶ授業の改善に努めていきたい。 ・研究主題の道徳科で、生き生きと話せる児童を育て、それを他教科にも生かすことを目指している。1年生の生き生きとした役割演技の姿や、6年生の仲間の考えを踏まえ、自分の考えがどう変わってきたかを語る姿など、自分の考えを言い合える学習集団を育てていきたい。 ・児童同士で聞き合ったり、質問したり、評価し合ったりできるように、ねらいに向かう意図的な交流を位置付けたい。
【ICT教育】 児童生徒の情報モラルを高め、情報社会に対応できる情報活用能力を育てる。	ICTを有効活用した学習活動の充実（「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実）	A	・「ウェブラーニング」「ドリルパーク」などを授業の終末の場面や土日、長期休業期間中に課題として位置付け、子ども自身が活用する場を多く設定してきたことで、子どもの活用意識も高まっている。 ・「スカイメニュー」等を活用して、授業の全員の考えを映し出し、自分でそれらを見て、考えの交流を進めていく（新たに学んだことを青ペンで記入）学び方での「交流学習スタイル」が広がってきている。 ・6年生理科での協働的な学びICT活用の実践を、職員会のミニ研修で共有し、低学年なりに取り入れることができ、大変勉強になった。 ・ノートの交流をタブレットを使って行い、自分のノートと仲間のノートを比べて学びを深めることができた。仲間からアドバイスを得たり、子どもたち同士で、評価を合ったりすることができた。 ・タブレットを活用して学習する時間が増えた。「デジタル教科書」「Google Classroom」「ドリルパーク」「発表ノート」など・ドリルパークとクラスルームを活用し、ドリル的な内容に取り組ませた。また、実技(保健体育科・合唱)では、音声、動画の機能を活用して取り組ませられるようにできた。マット運動や跳び箱で、自分のフォームを確認し、どこを直すべきか振り返ることができた。 ・学期ごとに、情報モラルを行うことは児童に有効的だった。 ・ICTを活用して、個々のつまずきに合わせて学習することができた。「生活単元・自立活動・算数・国語」などで調べ学習ができた。	・体育の授業での「おっかけ再生機能」や総合等の発表場面での「プレゼン作成」、デジタル教科書を使用した「メロディー作り」など、様々な活用の方法が出てきている。さらに活用方法を工夫しつつ、校内で広げていく。 ・今年度、校内で共有した協働的な学びのICT活用を全校に広げていけたように、今後も、ICTのよい活用実践を、職員会で提案し、実践を広げていく。 ・ロイロノート等、自分が把握したうえで活用できるようにする。児童自身がツールの一つとして活用できるようにしたい。 ・情報モラル教育を定期的に行い、意識させていきたい。(情報主任の呼びかけで、計画的に行っているのでも続けていく。)
【外国語教育】 外国語に慣れ親しみ、コミュニケーション能力を高める。	主体的にコミュニケーションを図る姿が具現される指導方法等の工夫	A	・3,4年生、5,6年生ともに、楽しく興味のもてる活動を工夫して取り入れられており、子どもたちの主体的なコミュニケーションの姿を引き出しながら、指導が進められている。子どもたちは英語でコミュニケーションをとることを楽しんでいる。 ・修学旅行では、奈良公園での班別研修の際に、出会った外国人へ自分から話しかけ、ネイティブの方々とコミュニケーションをとる6年生の姿がたくさんあり、実際の場面で学びが生かされていた。また、それに向けた「コミュニケーション・カード」を用意し、何度も自分たちで練習を進めていた取組もよかった。 ・ALTと連携して外国語学習を進められた。・英語に対して興味関心が高まった児童が増えている。 ・児童が、主体的に英語でコミュニケーションを図ることができた。また、ALTの先生を中心に正しい発音で話せる児童が増えた。 ・英単語をたくさん覚えたいという児童が増えた。・ゲームやクリスマスカード作りなど楽しく学ぶことができた。	・中学校英語科との連携や指導方法の関連を図っていく必要があるならば、今後、取組を進めたい。 ・英語学習に意欲的な児童とそうでない児童がいる。多いわけではないが、学習に抵抗を感じている児童への手立てを考えたい。 ・デジタル教科書など、タブレットを活用した家庭学習をさらに充実させていきたい。

町の重点	評価の窓	評価	12月までの成果	12月までの課題と1月以降（来年度に向けて）の改善策
【キャリア教育】 社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育てる。	勤労観・職業観を育成する体験活動の位置付け 事前・事後指導の充実（キャリアパスポートの活用）	A	・特別活動や生活科、総合、各教科、道徳科の指導を通して、◆低学年「好きなこといっぱい・できることいっぱい」◆中学年「自分と仲間とみんないっしょに」◆高学年「挑戦する・やりぬく・夢と希望」に向かう活動を通して、4つの力を意識した指導を継続している。 ・「未来の技能者育成事業」や「獣医師派遣」など、出前講座を活用し、職業や生き方について考えを深めている。 ・係の仕事などを工夫しておこなう子どもを見つけたときに、学級全体に広めることで、自分が周りのために工夫して働くことの楽しさを実感できるように指導した。（低・中学年） ・活動前に願いをもつこと、それに向けて取り組む活動中の子どもたちの姿を見届け価値付け、振り返ることで、自分やりきったという自立感・充実感を育てていけるよう指導することができた。（高学年） ・係の仕事を進んで行ってくれたり、学級のために気付けて動いている児童を価値づけることができた。また、「〇〇さんのおかげで～」と伝えることで、児童同士でも「〇〇さんのおかげで気持ちがいいよ」というような、認め合い方ができ、進んで働くことへの意欲を高めることができた。 ・未来の技能者育成事業や、役場の方からの被災地講話など、現場ではたらく方からの話はやはり説得力があり、本物にふれる体験や生のお話に接する機会を、今後もぜひ続けていきたい。	・小学校段階における職業的発達にかかわる諸能力(4能力)を、職員で再度確認し、日常生活の中の「係活動・委員会活動」や「福っこ活動」の中に、それらが網羅されていることを自覚して指導を進めること。 ・出前講座等で、職業の専門家やスポーツ選手に出会えた際に、「その方の夢や生き方」についてお話を伺うようにしている。子ども達に直接伝えていただき、感想をもたせたい。 ・すぐに職業に結びつけることは難しいが、自分の役割(分担)を果たす事の大切さを伝えていきたい。 ・キャリアパスポートの活用方法を考えながら取り組む。
【特別活動】 所属感を高め、よりよい生活や望ましい人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。	望ましい人間関係や学級集団としてのまとまりを育てる学級経営の充実（Q U 検査の活用）	B	・QU検査結果をもとに、配慮が必要な状態の児童と学級集団全体の様相を把握して、指導に生かすことに努めてきた。またその際には、町のQU研修で学んだ内容を活用している。 ・QUアンケートは町費負担で行なっていただけで、学級経営や学級の児童について理解をするいい機会になった。 ・夏休み前のQUアンケートの結果から、一人ひとりにどのような声かけをするのか、学級全体では子どもたち同士でどのようなつながりができるかといったのを明確にして、9月からの指導にあたることができた。 ・一人一人の児童が、どの区分群に所属しているかを把握し、個に応じた指導や言葉かけを心がけることができた。 ・活動するにあたり、みんなが楽しく取り組めるには、ルールやきまりが必要であるかどうかをみんなで考え、確認を行うようにして、心の侵害感を減らせるように努めた。 ・学級遊びをやることで、いつもと違う仲間と関わることが増えてきた。 ・児童が自治的に活動できるよう、学活での話し合い活動の進行、学級あそびの計画、係活動等、まず、自分で考え判断し取り組むよう仕向けることで、自分で工夫しようとする児童が増えた。また、仲間と相談しつつ取り組もうとする姿も見られるようになった。 ・児童朝会や帰りの会、お昼の委員会の放送などで進めているように、提案や取組に対して、子ども同士互いに認め合えるよう、双方向を意識した指導や言葉かけを行っていく。	【年間を通し「学級活動(1)共同の問題(2)共通の課題」をどう扱うか明確にして、取り組みをスタートさせる】 ・4月上旬の研究職員会にて、共通理解を図ってから実践の準備に入る。 ・係活動や行事への取組、学級遊びなどから、自己や集団の課題を見だし、その解決に向けて話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりする場を意図的に設定していく。 ・低学年の取組（ソーシャルスキルモンスター）のように、特学や通級以外でも、通常学級の特別活動の時間にソーシャルスキルトレーニングやアンガーマネジメントを取り入れることが、よりよい学級作りのためには絶対に必要だと感じる。
【健康安全教育】 運動に親しむ、進んで健康で安全な生活を営む態度を育てる。	体力向上のための取組 自ら命を守りきる防災意識を向上させるための指導方法や指導体制の工夫改善	A	・保体委員会の「業間マラソン」「ボールパス」「大縄跳び」活動や「岐阜県トップアスリート派遣事業」など、日常的に子どもの体力向上へ向けた取組がなされている。 ・「命を守る訓練」が計画的に取り入れられており、様々な災害を想定した内容や突然の訓練など、条件設定が網羅されている。 ・雨の日(教室でダンス)や寒い時期(体育館活動)も体を動かす機会を考えてくださり、子どもたちの体力作りに効果的である。 ・マラソンやボールパスを通して、子どもたちが体を動かすことの楽しさを実感し、体力の向上につながった。同じ種目ではなく、一定期間で新しい種目になるのも、子ども達にとってもよいと思う。 ・全校で、マラソンやボールパスラリー、ダンスに取り組み、体力向上に努めることができた。 ・「命を守ることを目的とした取り組みではないが」石川県の方へ全校の児童が思いをもって取り組む中で、児童会から地震や豪雨による被害の大きさを聞いたことにより、自分ごととして捉え、命の大切さを実感することができた。 ・児童の防災意識を高めるために、垂直避難の命を守る訓練を行うことができた。 ・業間の活動については、保健体育委員会を動かして児童が主体となって活動できた。	・今後も継続して、自分と仲間の健康を守るために、手洗い、うがい、消毒、咳エチケットなどを何ができるのか考えさせて、自分から実践できる子どもたちを育てていきたい。 ・防災についての正しい知識を教え、自分一人でも自分の命を守るための行動がとれるように指導していく。 ・感染症予防のために、手洗い・うがい、換気、手指消毒といった基本的な感染症予防を徹底していく。 ・子どもの肥満度(「安八の子」資料より)をなんとか下げていけるようにしたい。 ・マラソンで走る時間を増やすなど、取組を工夫する。
【コミュニティ・スクール】 地域と一体となって特色ある学校づくりを進める。	学校運営協議会の活動、地域学校協働活動を推進し、地域とともに行う学校づくり	A	・学校支援ボランティアの方々「見守り隊」「本の読み聞かせ」「琴・人形劇クラブの講師」など、多くの方が継続的に子どもたちの活動に関わっていて下さる。特に今年度は、国民文化祭の人形劇発表を、クラブの講師に支えていただき、無事やりきることができた。 ・運営協議会では、校区文化祭の「福東講座」を自主的にすすめていただき、親子でふれあいながら選択した講座で楽しめた。 ・学校運営協議会委員の方は大変協力的で、学校職員にとっても本当にありがたい。 ・地域の方の読み聞かせや見守りが手厚く、子どもたちを大切にいただけている地域であることが素晴らしいと思う。 ・文化祭の福東講座や、人形劇の発表、朝の読み聞かせ、見守り隊など、地域の行事に参加したり、地域の方が学校へ足を運んで下さり、子どもたちを地域と学校ともに守るはたらきをすることができた。 ・校区文化祭など、地域との関わりを大切にすることができた。 ・見守り隊の方々のおかげで安全に登下校できている。	・学校の授業場面(生活科や家庭科など)、校外学習(校区探検)などでも、ボランティアにどんどん入っていたけるよう働きかけを続けていく。 ・今後も、地域の方とともに子どもたちを見守っていけるように努める。 ・子どもにも、地域の方にお世話になり、支えられていることを、「ありがとうの会」などで折にふれ、伝えていきたい。
【学校経営】 全教職員が協力しチーム学校として活力ある学校経営をする。	勤務の適正化と教職員が健康でやりがいをもてる経営	A	・校内研修で、勤務の適正化の重要性を共有し、具体的な取組として、「かえるボード(自己決定・自己管理)」を進めている。 ・教師職員それぞれの担当分掌の取組や子どもへたちへの指導のよさについて、直接・間接的な価値付けを継続してきた。 ・報告・連絡・相談がしっかりとできた。 ・何があったときにすぐに学校の職員全体で動くことができる環境であることがとてもありがたい。 ・毎月ストレスチェックや資質向上について考える機会があり、働き方を見直したり、アドバイスをいただいたりして、自分を大切にしたい働き方に努めることができている。 ・学級での困りごとがあると、色々な先生が相談に乗ってくださるため、一人で抱えることなく働くことができている。 ・担任任せにせず、管理職、七年生の先生方が一緒に考えたり動いたりしてくださるので、担任としては心強い。 ・19時以降は、事前に申告書を提出することは有効的だった。19時までには仕事を終了する意識が芽生えて良いと思った。 ・水曜日と8の日は18時には帰るように心がけた。	・勤務の適正化については、個々の教職員の差も激しいため、分掌のバランス修正も含め、さらに取組を継続していくこと。 ・「教職員の資質向上」と「負担軽減」については、バランスをとりながら、実態に応じた取組をさらに工夫していく。 ・今後も、チームとして動き、助け合っていきたい。 ・今後も自身の健康のために、19時前に早めに退勤することを心がけたい。
【研修】 自己の課題を明確にし、主体的に研修を進め、確かな指導力を身に付ける。	研修主事を中心とした組織的・計画的な研修の実施	A	・年間の勤務状況との調整を考え、長期休業期間中(研修のために時間を割ける時期)に、いじめ不登校対応・不祥事根絶・道徳科年度当初研修などを位置付け、学期中は週毎の打合せの時間を利用したミニ研修とし、朝の会・帰りの会・学級遊びの指導やICT活用、行事への取組状況等を交流し、共有を図った。 ・遇予定ボードに道徳科などの授業予定を記入し、互いに授業を見合い、学び合えるようになり、研究授業の事前研を教室で実施し、参加職員が質問や代案を出し合いながら、研修を進めた。 ・教務主任から、職員会や打ち合わせや週報で、さまざま実践や大切にしたいことを話していただけることが、とてもありがたく、勉強になっている。懇談のことからICTの活用まで、幅広く話していただけることは、このような小規模校で若手にとっては、とてもありがたい。 ・毎週の打ち合わせで、朝の会・帰りの会の実践やICTの活用について各学級や先生方の実践を知ることができ、とても難しい。先生方の知恵や工夫を学ばせていただけて、自分の振り返りや学級に置き換えて考えることができた。 ・教頭先生から資質向上について、教務の先生から学級経営について、研究主任の先生から意識したいことや授業のポイント等を教えていただけるので、とても有難く思っています。 ・研究主任を中心に研修や研究会が計画的に行われ、学びを深めることができた。 ・研究推進を新たに道徳に設定したことで、研鑽の場が広がった。 ・資質向上研修があり、たくさんのことを学ぶことができた。 ・ICTの活用の仕方のアドバイスをしてくださり、大変勉強になった。	・研修のための時間がまとまって取れる時期と、学期中の打合せ等の時間活用とで、メリハリをつけながら、職員の困り感や必要間に対応した研修を、今後も位置付けていく。 ・教職員のニーズに応じた内容を取り入れることや、自分から他の指導に学ぶことのできる状況を創り出すことを継続していく。 ・研修や先輩方の言葉から学んだことを実践に活かせるようにしたい。 ・図工や音楽の指導法など実践的な内容を、夏休みなどの職員研修で学べるとよい。
【特別支援教育】 一人一人の教育的ニーズに応じ、自立し社会参加するための基盤となる力を育てる。	特別支援教育コーディネーターを中心とした校内支援体制づくりと合理的配慮の構築	B	・特支コーディネーターの学校全体に関わる対応(支援計画等の作成や保護者面談、設置申請に係る文書作成)、を担当と連携を図りながら進めていくことができた。 ・保護者との面談などは、担任と管理職とに関わりながら、保護者の意向を踏まえて進めた。 ・個の困り感を適切にとらえ、その困り感を一緒に解決していくという思いで、本人、保護者の方と連携をとりながら、進めることができた。 ・困り感を減らしていくために実践している姿や成長した姿を、本人と周りの仲間とともに喜ぶことで、自身が成長を実感できるように見届けることができた。 ・児童の対応や支援の仕方について、都度相談し方向性を確認することができた。 ・児童の普段からの状況を確認しつつ、保護者との連携を図りながら取り組むことができた。 ・児童の実態に合わせて、支援を行うことができた。また、個の困り感を本人や保護者と相談しながら進めることができた。	【教職員間・支援員の先生・保護者とのさらなる情報共有と連携強化】 ・特に、配慮が必要な児童に係る合理的配慮の内容については、該当児童の実態の把握とともに、保護者との面談を通して、さらに具体化していく必要がある。 ・特別な支援が必要な児童だけではなく、学級の児童一人一人に目を向けた支援ができるようになりたい。疎かになっているわけではないが、目を向けきれしていない点もある。 ・児童にどんな力を身につけさせたいか等の学級経営について、支援員の先生や授業に入ってもらっている先生に伝えたり、交流したりする場面を設け、共通にしたい。
			【学校関係者評価】 ・小規模校の特性を生かし、学年部での行事の取組や全校縦割り活動(福っこ活動)が意図的・効果的に取り入れられていることが、子ども達の主体性の育成につながっていると感じる。 ・出前講座「未来の技能者育成(県ものづくりマイスター派遣)事業」「トップアスリート派遣事業」「獣医師派遣講座」など、多くの外部講師と関わり合う場をもつことで、夢に向かって生き生きと活躍することへの憧れを感じ取ることができる。様々な世界で活躍する方々の生の声を聞いて学習する機会が多くあり、これからもこのような取組を継続してほしい。 ・全校児童が、授業や行事などに落ち着いて取り組んでいる姿に成長を感じた。また、先生方の元気な声や笑顔が、子ども達にも広がっていると思う。今後も、自信をもって活動が続けていってほしい。 ・校区文化祭、ひびきあい集会、ありがとうの会では、全校の前で自信をもって話したり、歌ったりする姿があり、子どもたちのすばらしい姿に感動した。特に、「能登の被災地の方々へ贈る呼びかけや全校合唱」は、心に迫るものがあつた。 ・児童のアンケート、保護者アンケート、教員のアンケートの分析がよくできている。成果や課題をはっきりさせて次の取組に生かす姿勢をぜひ継続してほしい。	